



NAOYA NISHIMURA

ANDREA BACCHETTI



コレッリ：

ヴァイオリン・ソナタ 二短調 作品 5-12 「ラ・フォリア」

イタリア・バロック中期の大作曲家として名声を成したコレッリ。二回り下のヴィヴァルディや更に下のヘンデルやバッハら、次世代の作曲家たちへも大きな影響を与えた。

イタリア語およびフランス語で「狂気」を意味する *follia* は、ポルトガル起源の古い古い舞曲である。元来は「狂ったように踊る」ための速い踊りだったが、時代が下るにつれて荘重な性格を増していった。

数ある *follia* の中でも最も有名なものがこのコレッリの作品で、主題は彼の作ではないが、独創的で自由な 22 の変奏がこの曲を不滅のものにした。なおバロックの凡例通り、楽譜には曲の骨格のみが記載されており、各奏者が自己の趣味と責任でもって旋律線と和声に肉付けをしていかなければならない。従って誰が演奏するかによって、かなり違った曲になりうるわけだ。演奏者にとっては楽しくもあり、怖くもある。

ベートーヴェン：

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ 第 5 番 へ長調 作品 24「春」

「春」のソナタ (スプリング・ソナタ) として

有名なこの第 5 番は、1801 年ベートーヴェンが 31 歳の年に完成。その甘美で心に染み入る曲想から、いつしか『春』と呼ばれ、大人気曲となったこの曲。解説では必ずと言ってよいほど、ジュリエッタ・グイチャルディ嬢との恋について言及され、曲調のやさしさと結び付けられる。おそらくこれは正しいのだが、ベートーヴェンは恋多き人であったし、これだけがこの名作を書きえた理由ではない。そうではなく、故郷のボンから音楽の都ウィーンに出てきて 6 年経ち、自分の芸術を高め、評価も確立されたこと。それと同時に耳が聞こえなくなっていくという絶望感に満ちた不安、またその運命に打ち勝つのだという燃えたぎる闘争心。それら諸々の感情が、芸術として昇華されたということであろう。ベートーヴェンはこれらの事柄について故郷ボンの親友で医者ヴェーゲラーに手紙で詳しく書いている。ちなみに、モーツァルトの手紙ほど有名ではないが、ベートーヴェンの手紙もたいへんに興味深く、また心を打つものである。

第 1 楽章冒頭、分散和音を奏でるピアノに乗って、序奏無しに始まるおだやかなメロディーは、ベートーヴェン本人が名づけたわけではないにせよ「春」のタイトルがよく似合う。中間部、短調への展開は春の嵐の風情。単に穏やかさ一辺倒ではなく、こうした変化

が盛り込まれ、聴き手を飽きさせない。第2楽章は「きわめて表情豊かに」と指示された、心地よい眠りを誘う楽章。第3楽章はごく短くひょうきんなスケルツォで、ほぼ間を空けずに第4楽章のロンドに入っていく。途中陽気な旋律と、威風堂々としたピアノのオクターヴによる重厚な展開とのコントラストが面白い。

ラヴェル：ヴァイオリン・ソナタ

40代に入り、天才作曲家の名をほしいままにしていたラヴェルは、タクシー乗車中の交通事故を機に、発症し始めていた脳の障害を悪化させ、50代半ばにはいよいよペンを持つことすらできず、作曲不能の状態に陥ってしまった。このヴァイオリン・ソナタはそんな彼にとって、最後の室内楽作品となったもの。完璧主義なラヴェルは推敲にかなりの時間を費やしたため、1923年の着手から完成までに約5年を要した。「ヴァイオリンとピアノという2つの根本的に相容れない楽器のためのソナタを書く場合、それらの性質の違いに安定をもたらすのではなく、独立性を認め、融和しがたい要素を強調することが大切であると考えている」とラヴェル自身も述べている通り、それまでのフランス音楽、そしてラヴェル自身の作風から、一步踏み出したような印象を与える作品である。

第1楽章は透明感あるピアノの前奏からスタートし、そこにやや古風なヴァイオリンのメロディーが流れるように加わり、揺れながら展開してゆく。第2楽章はこの曲を特に印象付ける「ブルース」の楽章。ピアノとヴァイオリンが異なる調性で書かれているのはまさに相違を目立たせるため。ヴァイオリンをギターのようにかき鳴らしたり、ポルタメントで歌わしてみたり、常に新しいことに挑戦し続けようとする作曲者の姿がそこには見られる。第3楽章は初めから終わりまで一定のテンポを機械的に保持。動き回るヴァイオリンにピアノが打楽器的な茶々を入れ、第1楽章や第2楽章で登場したメロディーが断片的に織り込まれて、一気にフィナーレへ向けて駆け抜ける。

サン＝サーンス：

序奏とロンド・カプリチオーソ 作品 28

作曲家のみならず偉大なピアニスト、そしてオルガニストでもあったサン＝サーンスにとって、リストやサラサーテといった同時代のヴィルトゥオーゾは、彼の創作意欲を刺激する存在であった。この曲は1863年に作曲、ヴァイオリンの鬼才サラサーテのために献呈されたもので、サラサーテの若々しく情熱に満ち溢れた演奏によって広くヨーロッパ中に知られることとなり、現在ではヴァイオリン独

奏の古典的レパートリーとして不動の位置を確立している。

アンダンテの序奏部、イ短調の情熱を秘めたヴァイオリンのメロディーが登場。音階的な動きを経てトリルによる下行進行に続き、アレグロ・マ・ノン・トロppo、8分の6拍子の力強いロンド・カプリチオーソの主題が提示される。サラサーテの故郷スペインの民族舞曲風のリズムや歌いまわしが随所に登場したのち、テンポを急速に上げたコーダで目まぐるしく技巧的なパッセージを奏でて華やかに締めくくる。

デ・ファリャ：

「7つのスペイン民謡」より第5曲「ナナ」

近代スペインの国民的作曲家デ・ファリャは、1907年から1914年のパリ留学の間にテオフィル・ゴージェの詩によるフランス語の歌3篇を書き、芸術歌曲への関心を示している。この経験を基にして帰国後の1915年には、旋律も詞もすべて作者不詳のスペイン各地の古謡を“再創造”した「7つのスペイン民謡」と題した歌曲を書き上げた。ヴァイオリンとピアノのための版を編曲したのは、ポーランドの名ヴァイオリニスト、コハンスキ。第5曲「ナナ」は、デ・ファリャの故郷アンダルシアの子守歌で、幼き日の彼が耳に馴染

んだ旋律だと言われている。高音と低音で16分音符1個分ずつずらされる伴奏は、ゆりかごの揺れる様子を表す。

バッツィーニ：

幻想的スケルツォ《妖精の踊り》作品25

ヴァイオリニストとして、パガニーニに認められたバッツィーニは、ミラノ音楽院の院長を務めた人でもあった。この曲は、超絶技巧のアンコールピースとして、多くの名ヴァイオリニスト達に好んで取り上げられる。曲名の“妖精”とは、ギリシャ神話で、半獣神パンが夢中になる美しいNymph(ニンフ)ではなく、悪戯好きですばしっこく小悪魔的なLutin(リュタン)の方をさしている。

パガニーニ：

カンタービレ 二長調 作品17

作曲家としてだけでなくヴァイオリニストとしても活躍したパガニーニは、数多くの超絶技巧曲を生み出した。それらの作品はヴァイオリン奏者にとって欠かせないレパートリーだが、このカンタービレのように、イタリアの青く澄みきった空を思わせるような開放的な旋律で、歌に溢れたとても美しい曲もある。一見シンプルに聴こえる中にもパガニーニ特有の広がりや織り込まれた名曲である。

西村 尚也

Naoya Nishimura, Violin

1985年名古屋生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高校卒業、同大学入学後、渡独。文化庁の奨学金を受け、マンハイム音楽大学を最優秀の成績で卒業。さらに同大学ソリスト科修了。

2001年イフラー・ニーマン国際ヴァイオリンコンクール(独)でジュニア部門第1位を受賞。

ファビオ・ルイジ指揮のPMF(パシフィック・ミュージック・フェスティバル/札幌)オーケストラほか、学生時代よりコンサートマスターとしての経験を積む。2007年にはバイエルン放送響のアカデミー生として同団の演奏に参加。2010年にはサイトウ・キネン・オーケストラに最年少で参加。ドイツ各地のオーケストラでコンサートマスターを歴任し、現在マインツ・フィルハーモニー管の第1コンサートマスター。ほかマンハイム、フランクフルト、ハンブルクの各国立歌劇場にも客演コンサートマスターとして招かれている。ソリストとしてもバーデン・バーデン・フィルやハンブルク響、名古屋室内管などと共演。ドイツの新聞各紙で「この若さとは信じられない円熟」などと高い評価を受けている。

アンドレア・バッケッティ

Andrea Bacchetti, Piano

イタリア、リヴィエラ海岸のレッコに生まれる。幼少期に、カラヤン、ホルショフスキ、ベリオといった芸術家にその才能を見いだされ薫陶を受ける。11歳でクラウディオ・シモーネ指揮、イ・ソリストティ・ヴェネティとミラノで共演してデビュー。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学、パリ国立高等音楽院、ジェノヴァのパガニーニ音楽院で学び、イモラ国際ピアノ・アカデミーでは、フランコ・スカラに師事する。これまでにイタリア国内はもとより、パリ、ロンドン、ベルリン、東京などの世界主要都市でリサイタルを開催。ザルツブルク音楽祭を含む多くの音楽祭からも招かれている。

2012年夏のPMFに指揮者ファビオ・ルイジの強い推薦で登場。その際には「天才的ピアニスト現る」と驚きをもって迎えられ、2014年の来日リサイタルツアーでその評価を確かなものにした。

2014年ソニー・クラシカルよりJ.S.バッハの「鍵盤作品全曲録音チクルス」がリリースされ、レコード誌上で絶賛されている。

<取扱上のご注意>●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズなどを付けないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤などは使用しないでください。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペンなどで文字や絵を書いたり、シールなどを貼付しないでください。●ひび割れや変形、又は接着剤などで補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。<保管上のご注意>●直射日光の当たる場所や高温・多湿の場所には保管しないでください。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管してください。●プラスチックケースの上に重い物を置いたり落としたりすると、ケースが破損しケガをすることがあります。



●アンドレアと僕

ヴァイオリン：西村尚也

三年ほど前、初めてアンドレア・バッケッティの録音を聴いたときの心洗われるような感動は、僕の中でいまだ鮮明です。J.S.Bach のごくシンプルな練習曲『シンフォニア』をこんなにも素晴らしい音楽として表現できる人がいるのか、と驚いたものです。それからすぐ、彼に僕の録音を送って「一緒に弾いてもらえないだろうか」とアプローチしてみたのですが、二つ返事で「是非やろう!」と応え、実現に向けて努力してくれたのも、アンドレアのまっすぐな人間性と、せっかちな性格をよく表していると思います。

実際に会ってみると、彼は僕と同様、なかなかデコボコとした人間でしたが、一緒に音楽をし、同じ釜の飯を食ううちに、僕らは心の通じ合う友人同士になりました。

この録音を自分で聴いていると、僕ら二人の響きあっているところ、ぶつかったりすれ違ったりしているところと、そこからまた波長の合っていくところなど、いろいろな瞬間があることに気づきます。これが僕ら二人の、音楽家としての「交わり」と「生きざま」を表しているのですが、結果としてこの演奏の記録が聴き手の皆様の心に届くものであれば、僕ら二人にとって最上の喜びです。